

2005.12.16, 1978.10

動物雑感

横浜市企画調整局長

田村 明

今から10年前という、もう隔世の感があるが、ソ連、東欧諸国の視察に行ったことがある。当時は米ソ対立が深刻で、共産圏への渡航は何かと障害のあった時代だし、まして東欧諸国となると、ほとんど日本には知られていなかった時代であり、ハンガリー動乱の直後で、ブダペストの町には市街戦の弾痕が生々しく残っていた頃であった。我々20人の視察団員は、大学、役所、会社などの研究者の集団で、都市計画関係は私と、もう一人位、あとは構造とか材料とかの専門家が多かった。連日、団地か建築現場、プレハブの工場か行政機関、またとくに建設関係の研究所かアカデミーを数多くまじめに訪問した。その結果は建築学会誌に特集号として報告されている。

そんな旅行の最後の行程は東ドイツであった。東ドイツは日本と国交回復していない関係もあって、我々はとくに緊張していた。ベルリンの壁、ベルリン封鎖などの記憶もまだ生々しかったのである。その東ドイツにワルソーから空路入ってホテルにつくが、まず真先に案内されたのが東ベルリンの動物園だったのである。園の入口に咲いていた真赤な花が妙に印象的であった。園内は広々として、動物たちもゆったりとしていた。ここでその動物園の詳細を書く気はないし、残念ながらもう記憶もだいぶ不鮮明になってしまっている。しかしおもしろかったのは、我々の団員が一様にひどく怒り出したのである。「我々専門家をこどもあろうに子供扱いして動物園などに連れてくるとはけしからん。」というわけなのである。まあそれまで堅いところばかりを訪問して、いろんな議論をしてきた連中にしてみれば、ばかにされたような気持であったのだろうし、旅の最後で気も立っていたのだろう。私の記憶が不鮮明なのは、そういうことで、そそくさに園を出てきてしまったことにもよるのである。

ところが私のように、都市を相手にしている者にとっては、偶然のことながら動物園はすごく楽



しかったのである。私自身、動物好きということもあるが、しかしそれよりも当時の東ベルリンはまだ戦禍のまゝに放置されている場所も多く、あとはソ連の焼きなおしのような個性のない建物の連続で、親せき、友人がいるが、それは仕方ないことで聞かなくてくれというアキラメの様子で、何か陰うつな感じであった。しかし、その中でもその当時でも動物園だけは、あの真赤な花がいっぱいに咲きこぼれ、子供達が無邪気にはしゃいでいた、暗い東ベルリンの中で、ここだけは人間らしい憩いの場であり、明るい世界だったのである。

「都市づくり」はギリギリの機能性だけでできるものではない。そこには豊かな「あそび」の空間が必要である。それは人間らしい心の豊かさ、明るさを支える場である。悲惨な中にも東ベルリンの動物園に私はそれを発見したのである。

本市の都市づくりも最終的にはそのような人間性を目標としている。私は野毛山のように起伏があり、変化に富み、かつコンパクトな動物園は好きだしそれなりによい動物園であると思っている。

しかし人口300万人をこえる本市のために新たな動物園も必要である。金沢の丘にいま66ヘクタールの自然公園を確保しようとしているが、ここに作られる動物園はまた本市の市民にいつか人間性を支える場として貴重な役割をこなうはずである。